

一 遠野郷（とおのごう）は今の陸中上閉伊（かみへい）郡の西の半分、山々にて取り囲（かこ）まれたる平地なり。新町村（しんちようそん）にては、遠野、土淵（つちぶち）、附馬牛（つくもうし）、松崎、青笹（あおざさ）、上郷（かみごう）、小友（おとも）、綾織（あやおり）、鱒沢（ますざわ）、宮守（みやもり）、達曾部（たつそべ）の一町十ヶ村に分かつ。近代或いは西閉伊郡とも称し、中古にはまた遠野保（とおのほ）とも呼べり。今日郡役所のある遠野町はすなわち一郷の町場（まちば）にして、南部家（なんぶけ）一萬石の城下なり。城を横田城（よこたじょう）ともいう。この地へ行くには花巻（はなまき）の停車場にて汽車を下（お）り、北上川（きたかみがわ）を渡り、その川の支流猿（さる）ヶ石川（いしがわ）の溪（たに）を伝（つた）いて、東の方へ入ること

十三里、遠野の町に至る。山奥には珍しき繁華の地なり。伝えいう、遠野郷の地大昔はすべて一円の湖水なりしに、その水猿ヶ石川となりて人界に流れ出でしより、自然にかくのごとき邑落（ゆうらく）をなせしなりと。されば谷川のこの猿ヶ石に落合うもの甚（はなは）だ多く、俗に七内八崎（ななないやさき）ありと称す。内（ない）は沢または谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

○遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし、ナイもアイヌ語なり。

二 遠野の町は南北の川の落合（おちあい）にあり。以前は七七十里（しちしちじゅうり）とて、七つの溪谷おのおの七十里の奥より売買（ばいばい）の貨物を聚（あつ）め、その市（いち）の日は馬千匹、

人千人の賑（にぎ）わしきなりき。四方の山々の中に最も秀（ひい）でたるを早池峯（はやちね）という、北の方附馬牛（つくもうし）の奥にあり。東の方には六角牛（ろっこうし）山立てり。石神（いしがみ）という山は附馬牛と達曾部（たつそべ）との間にありて、その高さ前の二つよりも劣（おと）れり。大昔に女神あり、三人の娘を伴（とも）ないてこの高原に来たり、今の来内（らいない）村の伊豆権現（いずごんげん）の社あるところに宿（やど）りし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を与うべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より靈華（れいか）降（ふ）りて姉の姫（ひめ）の胸の上に止りしを、末の姫眼覚（めさ）めて窃（ひそか）にこれを取り、わが胸の上に載せたりしかば、ついに最も美しき早池峯の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女

神おのおの三の山に住し今もこれを領したもう故（ゆえ）に、遠野の女どもはその妬（ねたみ）を畏（おそ）れて今もこの山には遊ばずといえり。

○この一里は小道すなわち坂東道（ばんどうみち）なり、一里が五丁または六丁なり。○タツソベもアイヌ語なるべし。岩手郡玉山村にも同じ大字（おおあぎ）あり。

○上郷村大字来内、ライナイもアイヌ語にてライは死のことナイは沢なり、水の静かなるよりの名か。

三 山々の奥には山人住めり。栃内（とちない）村和野（わの）の佐々木嘉兵衛（かへえ）という人は今も七十余にて生存せり。この翁（おきな）若かりしころ猫をして山奥に入りしに、遙（はる）かなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪を梳（くしけず）りていたり。顔の色きわめて白し。

不敵の男なれば直（ただち）に銃（つつ）を差し向けて打ち放せしに弾（たま）に応じて倒れたり。そこに馳（か）けつけて見れば、身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。のちの験（しるし）にせばやと思いてその髪をいささか切り取り、これを縮（わが）ねて懐（ふところ）に入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐（た）えがたく睡眠を催（もよお）しければ、しばらく物蔭（ものかげ）に立寄りてまどろみたり。その間夢（ゆめ）と現（うつつ）との境のようなる時に、これも丈（たけ）の高き男一人近よりにて懷中に手を差し入れ、かの縮ねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡（ねむり）は覺めたり。山男なるべしといえり。

○土淵村大字栃内。

四 山口村の吉兵衛という家の主人、根子立（ねっこだち）という山に入り、笹（ささ）を茹（か）りて束（たば）となし担（かつ）ぎて立上らんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心づきて見れば、奥の方なる林の中より若き女の穉児（おさなご）を負（お）いたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。きわめてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。児を結（ゆ）いつけたる紐（ひも）は藤の蔓（つる）にて、着（き）たる衣類は世の常の縞物（しまもの）なれど、裾（すそ）のあたりぼろぼろに破れたるを、いろいろの木の葉などを添えて綴（つづ）りたり。足は地に着（つ）くとも覚えず。事もなげに此方に近より、男のすぐ前を通りて何方（いづか）たへか行き過ぎたり。この人はその折の怖（おそ）ろしさより煩（わづら）い始（はじ）めて、久しく病（や）みてありし

が、近きころ亡（う）せたり。

○土淵村大字山口、吉兵衛は代々の通称なればこの主人もまた吉兵衛ならん。

五 遠野郷より海岸の田（た）ノ浜（はま）、吉利吉里（きりきり）などへ越ゆるには、昔より笛吹峠（ふえふきとうげ）という山路（やまみち）あり。山口村より六角牛（ろっこうし）の方へ入り路のりも近かりしかど、近年この峠を越ゆる者、山中にて必ず山男山女に出逢（であ）うより、誰もみな怖（おそ）ろしがりて次第に往来も稀（まれ）になりしかば、ついに別の路を境木峠（さかいげとうげ）という方に開き、和山（わやま）を馬次場（うまつぎば）として今は此方ばかりを越ゆるようになれり。二里以上の迂路（うろ）なり。

○山口は六角牛に登る山口なれば村の名となれるなり。

六 遠野郷にては豪農のことを今でも長者
という。青笹村大字糠前（ぬかのまえ）の
長者の娘、ふと物に取り隠されて年久しく
なりしに、同じ村の何某という獵師（りよ
うし）、或（あ）る日山に入りて一人の女
に遭（あ）う。怖ろしくなりてこれを撃た
んとせしに、何おじではないか、ぶつなど
いう。驚きてよく見れば彼（か）の長者が
まな娘なり。何故（なにゆえ）にこんな処
（ところ）にはおるぞと問えば、或る物に
取られて今はその妻となれり。子もあまた
生（う）みたれど、すべて夫（おつと）が
食い尽（つく）して一人此のごとくあり。
おのれはこの地に一生涯を送ることなるべ
し。人にも言うな。御身も危うければ疾
（と）く帰れというままに、その在所をも
問い明（あき）らめずして遁（に）げ還
（かえ）れりという。

○糠の前は糠の森の前にある村なり、糠の

森は諸国の糠塚と同じ。遠野郷にも糠森・糠塚多くあり。

七 上郷村の民家の娘、栗（くり）を拾いに山に入りたるまま帰り来（き）たらず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕（まくら）を形代（かたしろ）として葬式を執行（とりおこな）い、さて二三年を過ぎたり。しかるにその村の者猟をして五葉山（ごようざん）の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽（おお）いかりて岩窟のようになれるところにて、図（はか）らずこの女に逢いたり。互いに打ち驚き、いかにしてかかる山にはおるかと問えば、女の曰（いわ）く、山に入りて恐ろしき人にさらわれ、こんなところに来たるなり。遁（に）げて帰らんと思えど些（いささ）か（の隙（すき）もなしとのことなり。その人はいかなる人かと問うに、自分には並

(なみ)の人間と見ゆれど、ただ丈(たけ)きわめて高く眼の色少し凄(すご)しと思わる。子供も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子にはあらずといいて食(くら)うにや殺すにや、みないずれへか持ち去りてしまふなりという。まことに我々と同じ人間かと押し返して問えば、衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しちがえり。一市間(ひといちあい)に一度か二度、同じようなる人四五人集まりきて、何事か話をなし、やがて何方(どちら)へか出て行くなり。食物など外より持ち来たるを見れば町へも出ることもならん。かく言ううちにも今にそこへ帰って来るかも知れずという故、猟師も怖ろしくなりて帰りたりといえり。二十年ばかりも以前のことかと思わる。○一市間は遠野の町の市の日と次の市の日の間なり。月六度の市なれば一市間はすなわち五日のことなり。

八 黄昏（たそがれ）に女や子供の家の外に出ている者はよく神隠（かみかく）しにあうことは他（よそ）の国々と同じ。松崎村の寒戸（さむと）というところの民家にて、若き娘梨（なし）の樹（き）の下に草履（ぞうり）を脱（ぬ）ぎ置きたるまま行方（ゆくえ）を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或る日親類知音の人々その家に集（あつ）まりてありしところへ、きわめて老いさらぼいてその女帰り来たれり。いかにして帰つて来たかと問えば人々に逢いたかりし故帰りしなり。さらばまた行かんとて、再び跡（あと）を留（とど）めず行き失（う）せたり。その日は風の烈（はげ）しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、きょうはサムトの婆（ばば）が帰つて来そうな日なりという。

九 菊池弥之助（やのすけ）という老人は若きころ駄賃（だちん）を業とせり。笛の名人にて夜通（よどお）しに馬を追いて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。ある薄月夜（うすづきよ）に、あまたの仲間（ま）の者とともに浜へ越ゆる境木峠（さかいぎとうげ）を行くとて、また笛を取り出して吹きすさみつつ、大谷地（おおやち）というところの上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺（しらか）んば（）の林しげく、その下は葦（あし）など生じ湿（しめ）りたる沢なり。この時谷の底より何者か高き声にて面白いぞと叫（よ）ばわる者あり。一同ことごとく色を失い遁げ走りたりといえり。

○ヤチはアイヌ語にて湿地の義なり、内地に多くある地名なり。またヤツともヤトともヤともいう。

一〇 この男ある奥山に入り、茸（きの

こ）を採るとて小屋を掛（か）け宿（とま）りてありしに、深夜に遠きところにてきやーという女の叫び声聞え胸を轟（とどろ）かしたることあり。里へ帰りて見れば、その同じ夜、時も同じ刻限に、自分の妹なる女その息子（むすこ）のために殺されてありき。

一一 この女というは母一人子一人の家なりしに、嫁（よめ）と姑（しゅうと）との仲悪（あ）しくなり、嫁はしばしば親里へ行き来ざることあり。その日は嫁は家（いへ）にありて打ち臥（ふ）してありしに、昼のころになり突然と倅（せがれ）のいうには、ガガはとても生（い）かしては置かれぬ、今日（けふ）（きょう）はきつと殺すべしとて、大なる草薙鎌（くさかりがま）を取り出し、ごしごしと磨（と）ぎ始めたり。そのありさまさらに戯言（たわむれごと）とも見え

ざれば、母はさまざまに事を分（わ）けて
詫（わ）びたれども少しも聴かず。嫁も起
き出（い）でて泣きながら諫（いさ）めた
れど、露（つゆ）従（したが）う色もなく、
やがて母が遁（のが）れ出でんとする様子
（ようす）あるを見て、前後の戸口をこと
ごとく鎖（とぎ）したり。便用に行きたし
といえ、おのれみずから外より便器を持
ち来たりてこれへせよという。夕方にもな
りしかば母もついにあきらめて、大なる囲
炉裡（いろり）の側（かたわら）にうずく
まりただ泣きていたり。倅（せがれ）はよ
くよく磨（と）ぎたる大鎌を手にして近よ
り来たり、まず左の肩口を目がけて薙
（な）ぐようにすれば、鎌の刃先（はさ
き）炉（ろ）の上（うえ）の火棚（ひだ
な）に引（ひ）っかかりてよく斬（き）れ
ず。その時に母は深山の奥にて弥之助が聞
きつけしようなる叫び声を立てたり。二度

目には右の肩より切（き）り下（さ）げたるが、これにてもなお死絶（しにた）えずしてあるところへ、里人（さとびと）ら驚きて馳（は）せつけ倅（と）を取（と）り抑（おさ）え直に警察官を呼（よ）びて渡（わ）たしたり。警官がまだ棒を持ちてある時代のことなり。母親は男が捕（とら）えられ引き立てられて行くを見て、滝のように血の流るる中より、おのれは恨（うらみ）も抱（いだ）かず死ぬるなれば、孫四郎は宥（ゆる）したまわれという。これを聞きて心を動（うご）かさぬ者はなかりき。孫四郎は途中にてもその鎌を振り上げて巡查を追い廻しなどせしが、狂人なりとて放免せられて家に帰り、今も生きて里にあり。○ガガは方言にて母ということなり。

一二 土淵村山口に新田乙蔵（にったおとぞう）という老人あり。村の人は乙爺（お

とじい」という。今は九十に近く病（や）みてまさに死（し）なんとす。年頃（としごろ）遠野郷の昔の話をよく知りて、誰かに話して聞かせ置きたしと口癖（くちぐせ）のようになれど、あまり臭（くさ）ければ立ち寄りて聞かんとする人なし。処々（ところどころ）の館（たて）の主（ぬし）の伝記、家々（いえいえ）の盛衰、昔よりこの郷（ごう）に行（おこな）われし歌の数々を始めとして、深山の伝説またはその奥に住める人々の物語など、この老人最もよく知れり。

○惜（おし）むべし、乙爺は明治四十二年の夏の始めになくなりたり。

一三 この老人は数十年の間山の中に独（ひと）りにて住みし人なり。よき家柄（いえがら）なれど、若きころ財産を傾け失いてより、世の中に思いを絶（た）ち、

峠の上に小屋（こや）を掛け、甘酒（あま
ぎけ）を往来（おうらい）の人に売って活
計とす。駄賃（だちん）の徒（と）はこの
翁を父親（ちちおや）のように思いて、親
（した）しみたり。少しく収入の余（あま
り）あれば、町に下（くだ）りきて酒を飲
む。赤毛布（あかゲット）にて作りたる半
纏（はんでん）を着て、赤き頭巾（ずき
ん）を被（かぶ）り、酔えば、町の中を躍
（おど）りて帰るに巡查もとがめず。いよ
いよ老衰して後、旧里（きゆうり）に帰り
あわれなる暮（くら）しをなせり。子供は
すべて北海道へ行き、翁ただ一人なり。

一四 部落（ぶらく）には必ず一戸の旧家
ありて、オクナイサマという神を祀（ま
つ）る。その家をば大同（だいどう）とい
う。この神の像（ぞう）は桑（くわ）の木
を削（けず）りて顔（かお）を描（えが）

き、四角なる布（ぬの）の真中（まんなか）に穴を明（あ）け、これを上（うえ）より通（とお）して衣裳（いしょう）とす。正月の十五日には小字中（こあざじゅう）の人々この家に集まり来（き）たりてこれを祭る。またオシラサマという神あり。この神の像もまた同じようにして造り設（もう）け、これも正月の十五日に里人（さとびと）集まりてこれを祭る。その式には白粉（おしろい）を神像の顔に塗ることあり。大同の家には必ず畳（たたみ）一帖（いちじょう）の室（しつ）あり。この部屋（へや）にて夜（よる）寝（ね）る者はいつも不思議に遭（あ）う。枕（まくら）を反（かえ）すなどは常のことなり。或いは誰かに抱（だ）き起（お）こされ、または室より突（つ）き出（い）ださるることもあり。およそ静かに眠ることを許さぬなり。

○オシラサマは双神なり。アイヌの中にも

この神あること 『蝦夷（えぞ）風俗彙聞

（いぶん）』に見ゆ。

○羽後苅和野の町にて市の神の神体なる陰陽の神に正月十五日白粉を塗りて祭ることあり。これと似たる例なり。

一五 オクナイサマを祭れば幸（さいわい）多し。土淵村大字柏崎（かしわざき）の長者阿部氏、村にては田圃（たんぼ）の家（うち）という。この家にて或る年田植（たうえ）の人手（ひとで）足（た）らず、明日（あす）は空（そら）も怪（あや）しきに、わずかばかりの田を植え残すことかなどつぶやきてありしに、ふと何方（いずち）よりともなく丈（たけ）低（ひく）き小僧（こぞう）一人来たりて、おのれも手伝い申さんというに任（まか）せて働（はたら）かせて置きしに、午飯時（ひるめしどき）に飯（めし）を食わせんとて尋（た

ず)ねたれど見えず。やがて再び帰りきて
終日、代(しろ)を搔(か)きよく働(は
たら)きてくれしかば、その日に植えはて
たり。どこの人かは知らぬが、晩にはきて
物を食(く)いたまえと誘(さそ)いしが、
日暮れてまたその影(かげ)見えぬ。家に
帰りて見れば、縁側(えんがわ)に小さき
泥(どろ)の足跡(あしあと)に小ぢりあり
て、だんだんに座敷に入り、オクナイサマ
の神棚(かみだな)のところに止(とど
ま)りてありしかば、さてはと思ひてその
扉(とびら)を開き見れば、神像の腰より
下は田の泥(どろ)にまみれていませし由
(よし)。

一六 コンセサマを祭れる家も少なからず。
この神の神体はオコマサマとよく似たり。
オコマサマの社は里に多くあり。石または
木にて男の物を作りて捧(ささ)ぐるなり。

今はおいおいとその事少なくなれり。

一七 旧家（きゆうか）にはザシキワラシ
という神の住みたもう家少なからず。この
神は多くは十二三ばかりの童児なり。おり
おり人に姿を見することあり。土淵村大字
飯豊（いいで）の今淵（いまぶち）勘十郎
という人の家にては、近きころ高等女学校
にいる娘の休暇にて帰りてありしが、或る
日廊下（ろうか）にてはたとザシキワラシ
に行き逢（あ）い大いに驚きしことあり。
これは正（まさ）しく男の児（こ）なりき。
同じ村山口なる佐々木氏にては、母人ひと
り縫物（ぬいもの）しておりしに、次の間
にて紙のがさがさという音あり。この室は
家の主人の部屋（へや）にて、その時は東
京に行き不在の折なれば、怪しと思いて板
戸を開き見るに何の影もなし。しばらくの間
（あいだ）坐（すわ）りて居ればやがて

また頬（しきり）に鼻を鳴（な）らす音あり。さては座敷（ざしき）ワラシなりけりと思えり。この家にも座敷ワラシ住めりということ、久しき以前よりの沙汰（さた）なりき。この神の宿（やど）りたもう家は富貴自在なりということなり。

○ザシキワラシは座敷童衆なり。この神のこと『石神（いしがみ）問答』中にも記事あり。

一八 ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門という家には、童女の神二人いませりということを久しく言い伝えたりしが、或る年同じ村の何某という男、町より帰るとて留場（とめば）の橋のほとりにて見馴（みな）れざる二人のよき娘に逢えり。物思わしき様子にて此方へ来（き）たる。お前たちはどこから来たと問えば、おら山口の孫左衛

門がところからきたと答う。これから何処へ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答う。その何某はやや離れたる村にて、今も立派に暮せる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなど思いしが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸（きのこ）の毒に中（あた）りて一日のうちには死に絶（た）え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近きころ病（や）みて失せたり。

一九 孫左衛門が家にては、或る日梨（なし）の木のめぐりに見馴（みな）れぬ茸（きのこ）のあまた生（は）えたるを、食わんか食うまじきかと男どもの評議してあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食わぬがよしと制したれども、下男の一人がいうには、いかなる茸にても水桶（みずおけ）の中に入れて苧殻（おがら）をもつてよく

かき廻（まわ）してのち食べれば決して中
（あた）ることなしとて、一同この言に従
い家内ことごとくこれを食いたり。七歳の
女の児（こ）はその日外に出（い）でて遊
びに気を取られ、昼飯を食いに帰ることを
忘れしために助かりたり。不意の主人の死
去にて人々の動転してある間に、遠き近き
親類の人々、或いは生前に貸（かし）あり
といい、或いは約束ありと称して、家の貨
財は味噌（みそ）の類（たぐい）までも取
り去りしかば、この村草分（くさわけ）の
長者なりしかども、一朝にして跡方（あと
かた）もなくなりたり。

二〇 この兇變の前にはいろいろの前兆あ
りき。男ども苳置（かりお）きたる袜（ま
ぐさ）を出すとして三ツ齒の鍬（くわ）にて
搔（か）きまわせしに、大なる蛇（へび）
を見出（みいだ）したり。これも殺すなど

主人が制せしをも聴かずして打ち殺したりしに、その跡より秣の下にいくらともなき蛇ありて、うごめき出でたるを、男ども面白半分にとごとくこれを殺したり。さて取り捨つべきところもなければ、屋敷の外（そと）に穴を掘りてこれを埋（う）め、蛇塚を作る。その蛇は簀（あじか）に何荷（なんが）ともなくありたりといえり。